
桜咲く五月の街で

三途比呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜咲く五月の街で

【Zコード】

Z0648C

【作者名】

三途比田

【あらすじ】

北の大地、北海道、ここから僕達は始まった・・・。

第1話

北の大地、北海道も雪解を迎へ、五月になつて晩い春が訪れていた。雪解水の清らかな流れの小川に沿つて続く遊歩道の桜並木は満開で、見上げると、鮮やかに青い大空に、雄大に咲き誇る桜の花が、まるで浮かんでいるかのように見える。

「パパー、見て見て」

大きな桜の木の下にしゃがんでいる愛娘のさくらが、何かを見つけ、僕に見せようとしている。覗き込むと、緑色の雑草が生茂る桜の木の根元に、黄色い花びらを花火のように広げたタンポポが咲いていた。

「タンポポか、綺麗だね」

「ママに持つていってもいい?」

この小川の上流の、桜並木を見下ろせる小高い丘の上に、妻の墓は建てられている。僕は、七歳になる娘を連れて、七回忌の墓参りに東京から来ていた。

「タンポポさん、とっちゃつたらかわいそうだよ」

「そつかー、・・・それもそうだね」

娘は一瞬、残念そうな顔をしたが、タンポポを摘むのを諦めて、無邪気な笑顔で僕の顔を見ると立ち上がる。

「ママの所に行こう」

僕はそう言って、開いた左手を差延べると、娘は小さい手をしっかりと絡めて手を繋ぐ。そして、桜並木に包まれた遊歩道を、妻の眠る場所へと歩き出した。

四年振りに訪れた妻の墓は、きちんと手入れが行き届いていた。僕は、妻の墓前に立ち、手を合わせる。

(春奈、さくらも元気で素直な子に育っているよ)

瞼を閉じると、あの日の記憶が甦る。
10年前、ここから僕達は始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0648c/>

桜咲く五月の街で

2010年10月10日05時24分発行